

# 研究通信

第84号

1972年12月刊

村落社会研究会  
事務局

◇  
明治学院大学  
社会学部附属研究所

「研究通信 創刊号〜第五〇号」復刻に思う

― 大会印象記に代えて ―

原 宏

安房鴨川に直行する電車に乗ろうと、東京駅の地下深いホームへの階段を降りながら、私は便利になったものだと思つてくつぱく思つた。戦時中のことではあるが、千葉県には三回ほど行ったことがある。しかし房総半島に足を延ばしたのは初めてである。今までも海人の白浜・安房の神社・君津の町と、私のときどきの仕事にかかわって関心を寄せることはあったが、いつも東京止まりであった。牧野会員が「いつでもそうであるが、東北での大会にむかうときは、ふるさとへ里帰りするような気になるから不思議である。おそらく、会員諸氏も多かれ少なかれ、そんな気持で開催地の天童市へ向つたのではあるまいか」と書いていたことがあったが（『研究通信』七四号）、東北への参集は格別であるとしても、宿を共にして語り合う大会への足は、心なしかはずむものを覚えないではいられない。宿にてまず、『研究通信 創刊号〜第五〇号』復刻を手にした。

ズッシリと重みのある一冊の書物となったものを通覧してみると、村研二〇年の歩みのほぼ前半期にあたる十余年の流れが感慨も新たなものと思えた。「あとがき」にも少しばかり創刊当時のことによれた記事があるが、私も一つ二つ感じたことを書きとめてみたいと思う。いわずもがなの気もしないでもないが、村研創立二〇周年の記念事業の一つとして行なわれた『研究通信』の複製刊行に少しお役にたったこと、さらに限定出版の第三号を与えられたことの喜びからと許していただきたい。以下『研究通信』は復刻版のページで示すことにする。

さて、当然のことながら、全体社会の変化に対応する村落社会の変化が、村研の創立・成長の過程と二重写しのようにありありと読みとれる。そして同時に宿題（共通課題）

・研究傾向の変化・会員の増大（会員年令の若返り）・年報・研究叢書といったことがらの移り変わりが、あるいは淡々として、あるいは熱っぽく記録されている。また歴代の事務局や大会を引き受けた当番校の記事が誇ることなくつづらられている。しかし、これらについて論ずるのは私には不得手であるので、思いつくままのページを繰ってみることにしたいと思う。

「読めないことで有名」とまでいわれた号―それが創刊号である。それもそのはず―といっては失礼だが―、原紙切りから印刷まで、すべて当番校の会員の手作りのものであった。創刊号にはもう一つの涙ぐましい事実がある。それは創刊号は二回発行されていることである。復刻版を見るかぎりでは、割合に濃く印刷されて

いるが、これは復刊にあたって、印刷所が黒色のボールペンでなぞったから、幾分か見やすくなっているのである。このように化粧でもしなくては、電子複製の機械は受け付けてくれない。おまけに二〇年前のザラ紙だから、黄色に変色して、めくるたびに破れそうなるものになっていった。創刊号に初版と再版とがあるという話。

「会報第一号拝見しました。もっと正確に申せば拝見しようとする努力が、新制中学生が書いたよりも下手な文句と印刷ですの、却々読めませんでしたが大に努力して読めるだけ読みました。呵々、この次からせめて高等学校一年生位の程度になって下さい」(一四ページ、中々下)という故丸山会員の率直な意見を、編集子はこれまた率直に載せている。その同じ第二号に「会計上の見通しいちぢるしく好転しましたから、通信連絡委員の活動にも若干はより多くの費用を割きうるかと存じます。従って研究通信№2よりは№1の不評判を挽回する印刷が可能と存じます」(一一ページ下)と報告されたところなどを読めば、痛々しい気持ちさえしてくる。実際に紙面の変化が見られるのは第三号からである。

ここでひとつ注目しておきたいのは、創刊号・第二号の「ガリバ」・「連絡板」・「POST」といった見出しや随所に描かれたカット、これこそ当番校の会員が、全国の会員のだれかれを脳裏に浮かべながらつくった村研草創期の貴重な遺産であろう。手作りの味といおうか、手料理の思いやりといおうか、陶器ならさしずめ手づくねの茶碗の趣きとさえ思える。そしてある種の余裕さえ感じないではいられない。この調子はわずかではあるが、かなりきれいに

なった第三号にまでは残っている。その第三号の「東京大学某助教は農村関係の講義を開始されたが聴講者が多すぎて夏の実習の事もあり、大いに喜んで悲しんだり、個人的魅力もさることながら農村に対する「広く村落研究の」関心が如(何)にひろまりつゝある傾向の端的な現われと云わねばなるまい」(一九ページ、中)という記事を読んで、戦後の変化の激しさの一端をかいま見る気がしないではおれない。

第一回の仙台大会までに六号出ている。初の大会へ向けてしゃむに突っ走る姿が想像できるではないか。もうこのころはガリ版もプロの手に渡り、第一六号からはタイプ印刷となる。「臨時編集者の一人」が「この号から印刷面で一躍進をした。かつてこの研究通信の第一号の印刷に対するゴウゴウたる非難——それをお寄せ下さった方々に感謝する——のあったことも、よき思い出となるう」と書いている後記は、古い会員ならこれまた感無量であろう。

第六回大会で宿泊(合宿)大会が実現した。関係の記事は第二四号(一五五ページ、下)あたりから見られ、第二六号(一六九・一七二ページ)で「岩手県鳴子温泉にある八農民の家」において「合宿して行」ことの決定が通報された。岩手県とあるのはもちろん宮城県の誤りである。「鳴子温泉に決定」と報じた第二八号の呼びかけ(一八一ページ)、詳細にスケジュールが示された第二九号(二〇〇～二〇一ページ)に見られる事務局(愛知大学)や勸進元(東北大学)の並々ならぬ意気込みは、まさしく村研の歩みに大きなエポックをつくったことを物語っている。しかも宿泊大会の恒例化

がとくに始まったということだけでなく、七日・八日の大会に「六日夕刻参集九日朝解散」という但し書きがついている。これがいうところの前夜祭で、前夜祭の慣例もまたここに始まる。鳴子大会の余韻は第三〇号（二一〇ページ）にまで及んだ。

第一回の仙台大会、第六回の鳴子大会が「東北」を村研のメッカにしてしまったといっている言い過ぎだろうか。さきにあげた牧野会員の「里帰り」という言葉は、けっして誇張ではない。ものの何年かすれば、東北のどこかで開かれることを希望する気持になる。村研の「ふるさと」への回帰的志向、それが村研の体質となったのだろうか。東北の会員から、しかられるのを覚悟のうえで書いてしまったが、実は「村研の伝説」についてふれたからである。

あるとき、知人から「村研には会長もいない、閉会の辞もないという伝説があるそうですね」と聞かれたことがある。もちろん私は「伝説ではない。創立以来の伝統です」と答えた。また「社会学会で発表するのはコワくないが、村研で発表するのはコワイそうですね。これも伝統ですか」とも聞かれた。私は「いいえ、伝統ではなく、実感です」と答えた。山本登会員・大藪会員も仙台大会後、このことにちなむ筆を残している（四四ページ・上、四五ページ・中・下）ところで、新しい会員——特に若い会員の中には、村研草創期のあれこれを伝説化して理解している点もあるのではないだろうか。村研年報の古いところが、やたらに高価になり、いやいくら出しても店頭がないのだから、幻の村研年報とまでいわれるのも無理でない話である。その年報も、『村落社会研究』第〇集と形を改め、

増書房から出版されるようになったのが、昭和四〇年からである。これも村研の一つの転期を物語っている。前後するが、伝統といえ、会員はお互いに肩書きをとって、〇〇会員と表記することが創立以来の慣例であることを留意しておきたい。

さて、第二〇回記念の安房鴨川大会の印象記を求められたのであるが、ことは『研究通信』の復刻版のあれこれを断片的にふれただけのものになってしまった。いかにも残念であるが、なんだか数年ぶりで投稿するような錯覚すらおぼえる——去年の今ごろ、第七九号に「部落の語源」を書いたのに。

「いくぶんか少な目になったような感じがするが、会員にはなつかしい白髪、会員が敬愛してやまない有賀喜左衛門会員が、学長の激務の間をぬって宿泊参加されたことは大きな喜びであった。共同討議のしめくりは、りんりんとして所懐を述べる有賀会員によって自然のうちに生まれた。配本されたばかりの『日本常民生活資料叢書・第一巻・民具篇』（三一書房）に、四〇ページを越える「日本常民生活資料叢書 総序——波沢敬三と柳田国男・柳宗悦——」を書かれた気概がほとぼしるように思えた。いまでも、そのときの様子が目に浮かぶようである。「初心を忘れないで、心のふれ合いの上に」と。

（一九七二年一月三日）